

人魚の進化

吉岡郁夫[※]

はじめに

古来、世界各地で、海中に半人半魚の生物が棲んでいると信じられてきた。日本でも、北海道を除く全域に、人魚が出現あるいは捕獲されたという記録があり、人魚に関する伝説も広く伝えられている。このような奇怪な生物は博物学的な調査が進むにつれて、存在しないことがしだいに明らかになってきた。それと共に、最近では人魚の正体はジュゴンあるいはマナティという評価がほぼ固定したかの感がある。

私はあることがきっかけで、人魚伝説に接し、人魚に興味を持つようになった。そして、現在の日本人が抱いている人魚のイメージは最初からあったのではなく、時代によって変遷があることを知った。また、日本の人魚のモデルをジュゴンとすることに対しても、疑問を抱くようになった。

日本における人魚の出現記録

『和漢三才図会』（正徳3年、1713）では、日本最古の人魚の記録を、『日本書記』推古天皇27年（619）としており、これに従う研究者は少なくない。これには、次のように記されている。

二十七年の夏四月の巳亥の朔壬寅に、近江国言さく、「蒲生河¹⁾に物有り。真の形人の如し」とまうす。

秋七月に、摂津国に漁夫有りて、罟を堀江に沈けり。物有りて罟に入る。其の形兒の如し。

魚にも非ず、人にも非ず、名けむ所を知らず。（『日本古典文学大系』岩波書店）

『書記』では、人魚とはいっていないので、これを人魚と認めるかどうかは、主観によって左右されるところであろう。内田（1960, p.46）は、そのころの日本にはまだ「人魚」という言葉がなかったのだといい、南方（1973, p.30）はこれをサンショウウオと推定している。『書記』の記事からみて、これらの動物は淡水産と考えられ、淡水産で魚ではない動物といえ、日本ではオオサンショウウオしか考えられない。後述のように、中国でもオオサンショウウオらしいものを人魚として記録しているので、南方の説は当を得ているといえよう。

それ以後の記録としては、弘仁年間（810-824）に、琵琶湖で網にかかったという『広大和本

※愛知学院大学教養部教授

草』の記事を除くと、すべて海で記録されている。日野(1926)、藤沢(1961, p.102)、荒俣(1988, p.382)らの著書より、日本での人魚の記録をまとめてみると、表1のようになる。

第1表 人魚の出現記録

場 所	年 次	状 況	文 献
近江・蒲生河	推古27 (619)	出現	日本書記
摂津・堀江	〃 〃 (〃)	網	〃
出雲・安来浦	天平勝宝 8 (756)	出現	嘉元記
能登・ススノミサキ	宝亀 9 (778)	〃	〃
近江・琵琶湖	弘仁 (810-824)	網	広大和本草
伊予・ハシラノウミ	正暦 5 (994)	出現	嘉元記
伊勢・別保	崇徳・近衛帝ごろ (233-255)	網	古今著聞集
陸奥・そとの浜	文治 5 (1189)	漂着	北条五代記
安芸・イツエノウラ	〃 〃 (〃)	出現	嘉元記
津軽	建仁 3 (1203)	漂着	北条五代記
出羽・秋田の浦	建保元 (1213)	〃	〃
津軽	宝治元 (1247)	〃	〃
〃	〃 〃 (〃)	死体漂着	本朝年代記
陸奥・そとの浜	〃 2 (1248)	漂着	北条五代記
陸奥	宝治 (1247-1249)	捕獲	鎌倉史
若狭・小浜の津	延慶 3 (1310)	出現	嘉元記
伊勢・二見浦	延文 2 (1357)	〃	〃
豊後・大野郡	天文 19 (1550)	捕獲	江源武鑑
津軽・野内浦	元禄元 (1688)	〃	津軽一統志
若狭・乙見村	宝永ごろ (1704-11)	出現、殺す	諸国里人談
越中・富山四方浦	元文 2 (1737)	捕獲	街談文々集要
越後・海上	元文 (1736-1741)	遭遇	広大和本草
玄海	延享初 (1744-)	出現	甲子夜話
能登・鳳至郡	延享ごろ (1744-48)	〃	広大和本草
津軽・石崎村湊	宝歴 8 (1758)	〃	津軽日記
〃野内浦	〃 〃 (〃)	〃	六物新志

人魚像の変遷

現在日本人が頭に描いている人魚像は、上半身が女性で、下半身が魚の形をしたものであろう。ところが、日本の古文献に現れる人魚の形は必ずしもこのような人魚ばかりではない。これらの人魚像を一つの形にまとめて示すことは不可能である。ということは、もしこれらの人魚に、モデルとしての動物があるとすれば、一種類の動物ではない。人魚は実在の動物ではないので、時代によって人々のイメージが異なっている、と考えられる。そこで、各時代の文献に記された人魚の姿を抜き出してみよう。

最古といわれる『書紀』の人魚についてはすでに記した通りである。官撰の史書であるから、これらの記録は実在の動物にもとづいている、とみて差し支えないだろう。

次いで、鎌倉時代に著された『古今著聞集』（建長6年、1254）に出てくる人魚は、われわれの想像する人魚とはかなり違った姿になっている。

伊勢国別保といふ処に刑部少輔忠盛朝臣下だりけるに、浦人日ごとに網を引きけるに、ある日大なる魚のかしらは人のように有りながら、ははこまかにてうをにたがはず口さし出て猿に似たりけり。身はよのつねの魚にてありけるを三喉ひきいだしたりけるを、二人してになひたりけるが、尾なほつちにおほくひかれてけり。人のちかくよりければ、たかくをめくこゑ人の如し。又、なみだを流すことも人にかはらず。おどろきあざみて二喉をば忠盛朝臣のもとへ行き一喉を浦人にかへしければ、浦人皆切りくらひてけり。され共あへてことなし。

そのあぢはひとことによりけるとぞ。人魚というなるはこれていの物なるにや。

歯は細かく口が突き出して猿に似ている。人のような声でなき、涙を流したという。これを現在の動物に当てるとすると、すぐには思い浮かべることができない。

同じころ著された『北條五代記』には、鰭があると記している。『武道伝来記』には、宝治元年（1242）、津軽に流れ付いた人魚には紅色の鶏冠があり、顔は美女のようで、四足はるりを延べて、鱗は金色に光り、香深く、声はひばり笛のような静かな音であったという。この辺になると、かなり想像を混えて記しているように思われる。

17世紀前半（寛永年間）になると、『諸国里人談』に、若狭国で見たという人魚の記録があり、現在の人魚のイメージにかなり近づいてくる。

若狭国大飯郡御浅嶽は魔所にて、山八分より上に登らず。御浅明神の仕者は人魚なりといひつたへたり。寛永年中乙見村の獵師漁に出でけるに、岩の上に臥したる体にして居るもの見れば、頭は人間にして襟に鶏冠のこたく、ひらひらと赤きものまとひそれより下は魚なり。何心なく持たる擢をもて打ければ則死せり。海へ投入て帰りけるにそれより大風起って海鳴る事一七日止ず。三十日ばかり過ぎて大地震し、御浅嶽の麓より海辺まで、地裂けて乙見村一郷墜入たり。是明神の祟といへり。

ここでは、頭は人で首に赤いひらひらがあり、それから下は魚になっている。魚に人間の頭がついているとみればよい。

江戸中期の随筆集『甲子夜話』は次のように記している。

延享の始め伯父伯母二君平戸より江都に赴き給ひ、船玄海を渡るとき天気晴朗なりければ、従者ども船櫓によりて兆臨せしに舳の方十余間の海中に物出でたり。全く人体にて腹下は見えされども女容にして、色青白く、髪薄赤色にて長かりしとぞ。人々怪しみてかかる洋中に、蟹の出没することあるべからず杯と云ふ中に船をのぞみ微笑して海に没す。尋いで魚身あらはれぬ。没して魚尾出でたり。此時はじめて人魚ならんといへり。

ここで、はじめて長い髪があったと記録されている。上半身はまったく人と同じで、下半身は魚であったという。

正徳三年（1713）、寺嶋良安の著した『和漢三才図会』には、現在の人魚の図が描かれている。これを仮名混り文に書き直すと、次のようになる。

和名抄ニ兼名苑ヲ引テ云、人魚（一ノ名鯨魚）魚ノ身人ノ面ナル者也。

本綱ニ稽神録ヲ引テ云、謝仲玉ト云者有リ、婦人水中ニ出沒スルヲ見ルニ、腰ヨリ已下皆魚ナリ、又査道ト云者有、使ヲ高麗ニ奉ルトキ海沙中ニ一婦人ヲ見、肘ノ後ニ紅鬣一物共ニ有、是レ人魚也。

推古帝二十七年撰州堀江ニ罟^{アミ}ニ入ル物有、其形兒ノ如ク魚ニ非ズ人ニ非ズ名クル所ヲ知不ト云、今モ亦西海大洋ノ中ニ間^マ之有。頭婦女ニ似、尾ニ岐有リ。両ノ鰭ニ^{ミズカキ}蹠有、手ノ如シ。漁夫網ニ入雖モ^{アヤシ}奇ミテ捕不。

阿蘭陀、人魚ノ骨（倍以之牟礼ト名ク）ヲ以テ解毒ノ薬ト為ス、神功有リ。其骨ヲ器ニ作り、佩腰之ノ物ト為ス、色象牙ニ似テ濃カラ不。

このような人魚像は江戸中期以降にでき上がったとみていいだろう。

江戸時代の有名な蘭学者、大槻玄沢の著書『六物新志』（天明6年、1786）には、『和漢三才図会』と同じような人魚が描かれている。良安の図と違う点は腰にミノのようなものがあり、下半身の魚の部分が著しく長く、上半身の2倍以上もある。この図には、「花連^{ハレンテイン}の印著『東海諸島産物志』に載るところの人魚の図を、司馬江漢が模写したもの」という説明がある。その原典はフランス・ファレンタイン Frans Valentyn の“Oud en Nieuw Oost-Indiën”（『新旧東インド諸島』すなわち『東海諸島産物志』1724-26）である。ただし、この本の人魚像はルイ・ルナール Louis Renard の“Poissons écrivains et crabes de divers couleurs……”（『モルッカ諸島魚類彩色図譜』1718-19）²⁾から盗用したものとされている（神谷1989, p.19）。

明治になると、西洋の近代科学が移入され、人魚のモデルはジュゴンと信じられるようになった。それ以来、人魚＝ジュゴンという知識がしだいに一般化されて今日に至っている。しかし、この観念を明治以前に遡って当てはめることができるかどうかは、検討の余地がある。

中国の人魚

日本の人魚の起源は、研究者によって必ずしも一致していない。中国の人魚が伝えられたとい

う説やそれに西洋の人魚像が加わったとする説などがあるので、中国と西洋の人魚を見ることにしたい。

日本の人魚についての記述で、よく引用されるのは、『山海経』と『本草綱目』である。『山海経』(戦国時代以前)に出てくる人魚は淡水産、四つ足で、声は幼児のようだという。もう一つのタイプは『本草綱目』(1590)に引用されている海産の人魚である。これは人間の女性の形をしていて、肘の後に赤いたてがみのようなものがある。

日野(1926, p.170)は中国の人魚の文献をいくつかあげている。これらのうち、海産の人魚に関するものを、仮名混り文にして書いてみよう。

待制查道、使高麗を奉じ、晚一山に泊る。止って沙中を望見るに、一婦人有り、紅裳、双袒、髻鬟乱れ、肘の微に紅鬣有り、查水工に令し、篙を以て水中で担い、婦人を傷つけなからしむ。水を得て偃を仰ぎ身を復し查を望み挥手感舞して水に没す、工曰く某海上に在り此何物かいまだ省ず、查曰く此は人魚也、能く人と姦し水に処り人性に類す。(『徂異記』)海人魚海人魚東海に之有り、大なる者は長さ五六尺、状人の如く眉口鼻手氏頭、皆美麗なる女子と為し、俱に足らざる無し。皮肉白く玉の如し、鱗に細毛有り、五色で軽し、長さ一二寸、髪馬毛の如く、長さ五六尺、陰形丈夫なる女子と異なる無し。臨海の鰥寡(やもめ)多く取りて之を池沼にて養う、交合の際人と異なる無し、亦人を傷つけず。(『洽聞記』『華夷考』)

人魚人形に似て長さ尺余、食に堪えず、皮鮫魚にて利き材木を鋸く、頂上に入り小穿有り、氣中に従う。秦の始皇家中に人魚の膏を以て燭と為す、即ち此の魚也。東海中に出るに、今台州に之有り、按ずるに今帝王の漆橙家中に用い則ち火滅さず。(『異物志』)

大風雨の時、海怪有り、髪被う紅面魚に乗り往來す、魚に乗る者亦魚也。之を人魚と謂う。人魚の雄の者海和尚と為し、火長く有り祝う也、母海女に逢い、母人魚を見る。人魚の種族蘆亭者有り、新安の大魚南亭竹没考萬山と多く之有り、其の長さ人の如く、牝牡有り、毛髮焦黄にして短し、眼睛亦是黄、面黒く尾長く、寸許り、人を見るに則ち驚き怖れ水に入る。往々波に隨い颯に至り、人以て怪み競って之を逐う。(『広東新語』)

一方、淡水産の人魚についての記録には、次のようなものがある。

東北二百里龍侯山と曰い草木無し、金玉多く決々之水^{いずくに} 焉^{いずくに} 出で、東流す。千河注ぎ其中に人魚多し、其状鯉魚(なまず)の如く四足にして其音嬰兒の如し、之を食えば癡^{ちほうしょう} 疾無し。

(『山海経』北山経)

熊耳山の下水に人魚多し、伝山厭染水に人魚多し、陽華山楊水に人魚多し。(同中山経)³⁾

人魚荊州に臨む沮青溪に多く之有り、鯁^{なまず}に似て四足有り、声は小児の如し。其膏之を然すに消耗せず、秦の始皇帝驪山の家中に用いる所の人魚の膏是れ也と。(『陶弘景別録』)

乾道六年、湖州市中の弄蛇する客一魚を瓦盆に養う。状鮎に似て、色黒く腹に両手出で、壯者^{ごと}の若く十指皆具う。蓋しいわゆる人魚なり。(『夷堅志』)

淡水産の人魚は海産のものとはずいぶん形が違っているし、あまり人間に似ていないように思われる。人に似ているのは、幼児のような声と両手に10本の指があることぐらいであろう。これは

南方や日野がいうように、オオサンショウウオを差していると思われ、内田（1960, p.45）は、華北の山地の溪流に棲むシナハンザキ *Megalobatrachus sligoi* Boulenger であろうと述べている。しかし、オオサンショウウオが赤ん坊のような声を出すだろうか。上野益三は、図に口ひげを描いてあること、顎や頬がきしる音が小児の泣き声に聞こえることなどから、ギギ属の魚だったことを思わせるといい、また、生駒義博はオオサンショウウオが鼻を水面近くに出して、ギュギュと鳴くのを聞いている（碓井1993, p.206）。

前に述べた推古紀に出てくる動物は中国の淡水産人魚と同じ範疇に入るものであろう。『書紀』では「人魚」という言葉をつかっていないが、平安末期の『和名抄』には「人魚」という項目があり、

兼名苑云人魚一名鰐魚魚身人面者也、山海經注云、声如小児啼故名之。

と説明している。飛鳥時代には、まだ「人魚」の名はなかったが、中国との交流が盛んになり、日本にも「人魚」の知識が伝えられたことがわかる。「魚身人面」の人魚は海産の人魚と思われるが、この時代にはまだ、日本近海で人魚が目撃されたり、漂着したりという記録はない。

西洋の人魚

世界各地には、古くから人魚の伝説があり、神話にも半人半魚の海神がしばしば登場する。Ashton (1992, p.181) によると、本物の半人半魚の人魚の最も古い像は、バビロニアのコルサバート宮殿から発見された神像だという。

ギリシア神話には半人半魚の神が多く登場し、ギリシア人もローマ人も人魚の存在を信じていた。ギリシア神話に出てくるセイレン Seiren は上半身が女性、下半身が鳥であるが、ローレライの伝説のように、いつの時代からか下半身が鳥から魚に変わってくる。ギリシア神話にはネレイス Nereis という上半身が美女、下半身がイルカの神があり、内田（1960, p.44）は、セイレンの下半身が魚になったのはネイレースと混同されたのだらうと述べている。

西欧には半人半魚の怪物が多いが、⁴⁾すでに多くの人が述べているので、詳しいことは他書に譲り、ここではジュゴンと人魚との関係について記すことにしたい。

古代ローマの博物学者プリニウス Gaius Plinius Secundus の大著“*Naturalis Historia*”（博物誌）には、スペイン西南のガジス湾で男の人魚が見られると記している。この人魚は大西洋のマナティであろうといわれている。

中世のルネサンス時代には、ゲスネル Conrad Gesner の“*Historiae Animalium*”（動物誌）に多数の怪物が収められ、そのなかに男性の人魚がある。彼はノルウェー沖で捕らえられた“海の修道士”やポーランド沖で発見された“海の司教”の図を載せている。

この本が出る半世紀前の15世紀末コロンブスが新大陸を目ざして航海をしているとき、人魚に出あった記録がある。1493年1月9日の航海日誌に、コロンブスがリオ・デ・オロを遡るとき、3頭の人魚が彼らを出迎えた。それらはアフリカのギニアで見たものと同じだったと記している。

神谷 (1989, p.14) は、カリブ海の人魚をアメリカマナティ、アフリカ西海岸のそれをアフリカマナティと解釈している。

マナティ Manati の名はカリブ族が人魚を manattoui と呼んだことに由来している。ゲスネルもマナティの名を知ってはいたが、『動物誌』に描かれたマナティ (海牛) は角の生えた牛のような動物である (神谷1989, p.16, Ashton 1992, p.201)。

1811年、ドイツの動物学者イリーゲル J. C. Illiger は海牛目に Sirenia の名を与えた。シレニアはセイレンからとったことはいふまでもない。それまでグジラやアザラシと同じ仲間とされていた海牛を、イリーゲルは海牛目として独立させ、それをマナティ属、ジュゴン属、カイギュウ属に分類した。海牛目にセイレンの名が与えられたのは、西欧の動物学者が海牛類を人魚のモデルと考えていたからである。

一方、ジュゴン dugong の名はマレー語でこの海獣を dūgong と呼んでいたことによる。ジュゴンははじめてわが国に紹介した書物は、ドイツ人ブロンメ Traugott Bromme の訳本『動物学 (哺乳類)』といわれる (神谷1989, p.21)。この本は田中芳男の訳で、明治8年 (1875) に出版された。

ジュゴンは今では沖縄近海から姿を消しているが、琉球王朝時代には西表島近海に棲んでいた。沖縄では、ジュゴンは“ザンノイオ” (犀の魚) と呼ばれている。人魚のモデルがジュゴンであると説明したのは、南方熊楠である。だが、江戸時代の人魚のモデルがザンノイオであったという証拠はない。『和漢三才図会』にも、ジュゴンの名は出てこない。この知識が日本に入ったのは、おそらく西欧の博物学を導入した明治初期であろうが、南方の書いたものが一般向けの啓蒙であるところに意味がある。彼はそのなかで、「今日、学者が人魚の話の起源と認むるは、ジュゴン (儒艮) とて、インド、マレー半島、濠州等に産する海獣じゃ」と書いている (南方1973, p.307)。

この知識は欧米の科学を吸収することに忙がしかった日本の動物学者、博物学者によって信じられたらしい。南方はおそらく大英博物館などでこうした知識を仕入れたと思われる。しかし、明治時代には、ようやく義務教育が普及し始めたところであり、ジュゴンという動物の名を知らない人の方が多かった。この動物の名が一般の人々の間にまで普及するには、まだかなりの年月を要したはずである。

人魚のモデル

近世以降、現代に至る日本の人魚は主に海産のものとされ、この知識は中国から入ってきたと考える人が少なくない。中国では、すでに見たように、海産の人魚は女性の顔で髪があるという記録が多い。文献によって、肘に赤いたてがみがついていたり、頂上に小孔があったり、あるいは雌雄があり、毛髪は短く顔は黒く尾が長いなどの違いがある。日本の人魚像は中国のそれとは必ずしも同じではないが、『和漢三才図会』などには中国の文献が引用されているので、中国の考え方がとり入れられたことは間違いないと思われる。

中世の人魚は近世以降の人魚とはかなり異なっている。例えば『古今著聞集』では、頭が人のように歯は細かく、口が突き出て猿に似ているという。これはどう見ても、近世以降に描かれた人魚の顔とは別のものである。内田(1960, p.47, 1962)はこれをリュウグウノツカイという魚に当てている。この魚は体長が非常に長く、10 m にもなる。頭は普通の魚と違って、人か猿の横顔の感じがしないでもない。頭の頂上から後に5～6本の非常に長い鰭のすじがあり、長い髪のようになびく。銀白色の皮膚には鱗がなく、小さいイボのようなボツボツがある。内田はこの魚の特徴が『本草綱目』の蜃や『古今著聞集』の人魚によく合うと述べている。

ところが、近世以降の人魚の説明には、しばしばジュゴンが登場する。しかし、生物学者のなかには、ジュゴン説を支持する人ばかりではなく、それを否定する人も少なくない。

大島(1933, p.81)は『和漢三才図会』を読んで、すぐこれは海牛の類だと気付いたという。神谷(1989)はジュゴン説の検証を行っていないが、これを通説としてジュゴン説に従っている。民俗学者の谷川(1980, p.238)は、暖海性のジュゴンが暖流に乗って、日本海沿岸の若狭までやってきたと推測し、ジュゴンを人魚のモデルとしている。

それに対して、高島(1986, p.253)は、日本にはジュゴンを知るはるか前から人魚伝説があり、昔から人魚といっているものは一つだけではない。また、ジュゴンとは別物であるが、後世いつとはなしに人魚とつながりができてしまったと述べている。末広(1964, p.229)は、ジュゴンの分布から考えて、人魚はジュゴンではなく、他の水棲動物ではないかと疑っている。

ジュゴンも含めて、人魚のモデルを複数の動物と考える研究者も少なくない。南方(1933, p.105)は「儒艮は暖地の産にて、若狭などにある者ならねど、海狗などの海獣、多少人に類せる者を人魚と呼」んだのであろうという。国文学者の藤沢(1933, p.105)は、ジュゴン、海獣(アザラシ、オットセイ、アシカ)、サメなどを海女と見誤ったのだらうといい、これらのうちジュゴン説はいちおう有力であらうと述べている。

人魚伝説とジュゴン

全国各地には、人魚に関する伝説が数多く伝えられている。それらのうち、最も広く分布し、よく知られているのは、八百比丘尼に関するものであろう。これには多くの変異や修飾があるが、その中核になっている話がある。父親が人魚を釣り、あるいは人魚の肉を持ち帰り、娘がそれを食べたところ、年をとっても容貌が衰えず、八百歳になっても娘のようだったので、人々は八百比丘尼と呼んだというのである。

八百比丘尼の生地といわれるところは若狭を中心として、全国各地に分布している。若狭では、小松原の産という伝承が多いようだが、若狭だけでもいくつかの生地がある。尾張でも、春日井市高蔵寺町白山の円福寺山内に、比丘尼が生まれたという比丘尼谷がある(愛知県教育員会1937, p.117)。人魚伝説の分布を文献から拾ってみると、表2のようになる(柳田1968, 1970, 杉原1970, 巖谷1978ほか)。これは人魚伝説のすべてを網羅したものではないので、漏れたものが多いと思

第2表 人魚伝説の分布

日 本 海 沿 岸	太平洋・瀬戸内海沿岸
筑前『耶馬台探見記』（螺貝） 隠岐『隠岐のすさび』 伯耆 同上 因幡『因幡誌』 丹後『竹野郡誌』 丹波『丹州三家物語』 若狭『本朝神社考』『若耶郡談』『若狭都 県志』『向若録』『笈埃随筆』『桜 井秀君注意』『若狭志』『西北紀 行』『国史実話』『梅の塵』『拾椎 雑語』『新編会津風土記』 越中 伝説 能登『能登国名跡志』 越後『温古の栞』家伝、伝説 佐渡『佐渡の島』 会津『新編会津風土記』（九穴の貝）	土佐『西部余翰』『土佐古跡巡覧録』 備後『西備名区』 播磨『播磨鑑』 近江『廣大和本草』『語詠歌一千題』 伊賀 伝説 紀伊 家伝 伊勢『古今著聞集』 飛騨『益田郡誌』 尾張 伝説 志摩 伝説 伊豆 伝説 武蔵『新編武蔵国風土記稿』 磐城 伝説 陸前 伝説 陸中『清悦物語』『本朝神社考』

うが、だいたいの分布を知ることができる。

この表を見ると、人魚伝説のある地域は日本海側と太平洋側とに、ほぼ均等に分布しているが、その頻度は若狭に集中していることをうかがうことができる。これを人魚の出現記録（表1）と比較してみると、日本海側では、玄海、出雲、若狭、能登、越中、越後、出羽、津軽と越後以北にも出現しているのに対し、太平洋側では、伊予、安芸、摂津、近江、伊勢、陸奥にわたっているが、伊勢から陸奥の間では記録されていない。しかも、津軽で6回、陸奥で3回と北の海にしばしば現れているのにひきかえ、若狭ではわずか2回しか記録されていない。これは記録された人魚と伝説上の人魚とは別物と考えなければならない。

ここで、日本の人魚ジュゴンがモデルかどうかを考えてみよう。ジュゴン＝人魚となった理由として、一般に伝えられているところによると、ジュゴンがごく浅い海底で、尾部で体を支え、上半身を海上に出している姿が人間に似ているからだという。また、子供を鰭で抱いて乳を飲ませている姿が人に似ているともいわれている。ところが、多くの動物学者は、そういう姿が観察されたことはない、と否定的である（浅野1938, p.1223, 松浦1943, p.149, 内田1960, p.44）。このように伝えられているのは、ジュゴンと人魚を結びつけるため、強いて擬人化して考えたからであろうとしている。

ジュゴンはマレーシア、フィリピン、パラオ、台湾、琉球、ニューギニア、オーストラリア北岸、南インド、スリランカ、紅海、東アフリカ、モーリシャスなど、インド洋、太平洋、東シナ海、南シナ海に広く分布していたが、今では、紅海、南シナ海の限られた海域と、オーストラリアのクイーンズランド付近にしか見られない（朝日1977, p.189）。末広（1964, p.227）もいっているように、日本近海ではジュゴンを見ることはほとんどできないし、まれに見る可能性があるとしても、それは九州最南端よりずっと南の方である。

日本では東北から九州に至るまで、ほぼ全国的に人魚の出現が記録されている。今と昔では、動物の分布も環境も大きな差があるとはいえ、暖海性のジュゴンがこれほど多く日本海沿岸や東北近海に現れるとは、とても信じられない。高島（1986, p.251）によると、明治40年（1907）ごろ、宮崎県南那珂郡油津町付近で網にかかったのと、大正14年（1925）ごろ、鹿児島県阿久根で捕らえられた記録があるぐらいだという。高島はまた、昭和14年4月の新聞に、愛知県南知多町野間の燈台付近に海獣が漂着したという記事があり、その写真からジュゴンと判断している。これらの地方はすべて黒潮の洗う太平洋岸である。

黒潮は日本海流ともいい、日本近海では最も大きい海流である。黒潮はルソン島および台湾の東沖から琉球西沖を北上し、奄美大島の北西方で対島海流が分かれて本海へ向かう。残りの本流は主に、屋久島と奄美大島の間を通り、土佐沖、紀州南沖を経て北上する。そして、房州東沖で一分枝（東北暖流）が分かれた後、本流は蛇行しながら東へ向かっている。

対島海流は本流から分かれた後、五島列島の西から対島海峡を通り、本州の日本海沿岸を北上し、津軽西沖に達する。その一部は津軽海峡を通して太平洋側へ行き（津軽暖流）、残りは北海道西岸を北上し、宗谷海峡からオホーツク海側に出る（宗谷暖流）。

ジュゴンが対島海流に乗って日本海沿岸に漂着する可能性もないとはいえないが、これまでに、そういう確かな記録はない。対島海流になる海流は黒潮の流量の約1割にすぎないし、黒潮よりも低温、低塩分で、透明度も低い（竹内1978, p.35）。たとえ人魚の記録のなかにジュゴンが含まれていたとしても、日本海側の方が太平洋側よりも多いとは考えられない。とくに、人魚の出現記録が津軽近海に多いことは、ジュゴン説にとって不利な材料である。

一方、日本近海の寒流には、親潮（千島海流）とマリン海流がある。親潮はオホーツク海の東樺太海流を主体とし、それに東カムチャッカ海流が合流して、千島中部および南部沖から北海道南部沖を経て、東北地方三陸沿岸とその沖合に向かって南下する。日本海には、間宮海峡を抜けて大陸側を南下するマリン海流があり、その一部は日本海中央寒流として南下する。

このような海流の状況からみると、記録に現れた人魚には、ジュゴンよりもむしろ鯨類や鰭脚類の可能性が大きい。中西（1990, p.143）によると、日本の海岸に打ち上げられる哺乳類には、クジラとイルカが最も多く、アカボウクジラ、カズハゴンドウ、オキゴンドウ、マゴンドウなどが集団で乗り上げたり、佐渡では、北西の季節風が吹く旧暦の2、3月に、寄りクジラが多い。

鰭脚類は、北海道北部まで回遊してくることはそれほど珍しくないが、まれには中部日本や西日本まで遊泳してくることがある。アザラシ類では、ゴマフアザラシは四国、ワモンアザラシは

福岡県でも発見され、アゴヒゲアザラシは対島で発見されたことがある。トドは北海道南部まで回遊することがあり、オットセイは日本海沿岸や千葉県あるいはそれ以西で発見されたことがある。ニホンアシカはかつて北海道南部から九州まで分布していたが、1951年、隠岐北方の竹島で目撃されたのを最後に、絶滅したとみられる（中西1990, p.149）。

海流の流路や流量は毎年大きく変動しており、それが陸上の気象にも影響し、災害と結びつくことが知られている。日本では、その年の海流の変化によって、アザラシやオットセイなどが南下したり、クジラやイルカの類が北上したのを人魚と見誤ったのではないだろうか。ジュゴンの人魚とみたのは琉球近海のみで、日本ではジュゴンも含めて、複数の動物を人魚として記録した可能性が大きい。

むすび—人魚像の確立

近年、人魚のモデルをジュゴンと主張する研究者が多いが、かつてジュゴンが近海に棲息したことのある琉球を別とすれば、日本の人魚は必ずしもジュゴンであるとはいえない。日本での人魚の出現記録からもわかるように、人魚のモデルとなった動物は一種だけではなく、複数の種類と考えられる。これらの動物には、クジラ、イルカ、アザラシ、アシカ、オットセイ、リュウグウノツカイなどが考えられるが、明治以前の記録には不十分で、動物の名を明らかにすることができない。

高島（1986, p.524）が「ジュゴンや海牛は人魚とは別物であるのに、後世いつとはなしにつながりができてしまった」と述べているように、「ジュゴン」の名は明治以後、西洋の知識として移入されたものである。ただ、南九州ではジュゴンが漂着したことがあったかも知れないが、この地方で琉球のザンノイオの名が知られていたとすれば、人魚として騒がれたり、特別扱いされることはなかったであろう。

古い時代（おそらく奈良時代ごろ）に中国から入った人魚という考えが、時代と共に日本人のイメージに合うようにアレンジされ、変化してきた。江戸時代には、さらに西洋の知識が加わり、『和漢三才図会』などによって、それに描かれた人魚像が普及し、広く信じられるようになったと考えられる。

こうして、目撃された人魚とは別の、想像上の「人魚」という動物ができ上り、伝説のなかに取り入れられたのであろう。従って、伝説上の人魚は記録に現れた人魚とは別のものとして扱うべきであろう。

謝 辞

本稿を草するにあたって、伊藤良吉氏から貴重な図書をお借りし、種々の御教示を得た。また、津田豊彦氏からも伝説の分布について御教示を得た。厚く感謝の意を表します。

注 記

(注1) 日野川下流。

(注2) 荒俣1988, p.384にルイ・ルナールの原因が引用されている。アンボイナ近海で捕獲されたものという。

(注3) 本田 濟・沢田瑞穂・高馬三良訳『抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経』(中国の古典シリーズ4) p.470, 平凡社, 1973。

(注4) 『六物新志』には、「安蒲児止私巴亜列之書二載ル人魚図」が引用されている。これはフランスの外科医アンブロアス・パレ Ambroise Paré の外科書に、人魚奇形 Sirenomelia として取り上げられたもので、いわゆる人魚ではない。この図は人魚の例としてよく引用されているが、人魚と違って下肢があり、尻から下が魚のように鱗をもった尾になっている(神谷199, p.31)。

参 考 文 献

愛知県教育会(伊奈森太郎)編『愛知県伝説集』117~118頁, 郷土研究社, 1937。

荒俣 宏『世界大博物図鑑 5 哺乳類』378~383頁, 平凡社, 1988。

朝日 稔『日本の哺乳動物』189~190頁, 玉川大学出版部, 1977。

浅野長雄「パラオの儒艮に就てⅠ」『植物及動物』6巻6号1048~1051頁, 1938。

———同上Ⅱ。同上6巻7号1199~1228頁, 1938。

Ashon, J. "Curious creatures in zoology" J. C. Nimmo, London, 1890 (高橋宜勝訳『奇怪動物百科』博品社, 1992)。

藤沢衛彦『伝説と歴史』84~87頁, 啓松堂, 1933。

———『日本伝説全集』別巻, 115~116頁, 河出書房, 1956。

———『図説 日本民俗学全集』4巻, 93~106頁, あかね書房, 1961。

浜本鶴賓「穴の海に絡まる伝説」『備後史談』4巻8号3~4頁, 1928。

日野 巖『動物妖怪譚』161~180頁, 養賢堂, 1926 (復刻 有明書房, 1979)。

巖谷小波編『説話大百科事典 大語圏』7巻, 346~351頁, 名著普及会, 1978 (復刻)。

堀田吉雄「南島の人魚談」『第10回東海民俗研究会公開講演要旨』1978。

神谷敏朗『人魚の博物誌』6~32頁, 思索社, 1989。

松浦義雄『海獣』142~153頁, 天然社, 1943。

南方熊楠「若狭の人魚」『郷土研究』4巻6号, 1916 (『南方熊楠全集』3巻, 239頁, 平凡社, 1971)。

———「人魚の話」『牟婁新報』明治34年9月24日, 27日, 1901 (『南方熊楠全集』6巻, 305~311頁, 平凡社, 1973)。

中西弘樹『海流の贈り物 漂着物の生態学』129~130, 143~151頁, 平凡社, 1990。

- 大島正満『動物物語』80～85頁，講談社，1933。
- 末広恭雄『魚と伝説』224～230頁，新潮社，1964。
- 杉原丈夫編『越前若狭の伝説』674～684頁，松見文庫，1970。
- 高島春雄『動物物語』248～254頁，八坂書房，1986。
- 竹内能忠『黒潮－日本列島をはぐくむ流れ－』海洋出版，1978。
- 谷川健一「もの言う南海の人魚〈儒艮〉」『アニマ』1974年5月号（『谷川健一著作集』1巻，233～245頁，三一書房，1980）。
- 内田恵太郎「人魚考」『自然』15巻8号42～47頁，1960。
- 「続人魚考」同上17巻9号52～57頁，1962。
- 碓井益雄『イモリと山椒魚の博物誌』196～212頁，工作舎，1993。
- 柳田国男「東北文学の研究 2 清悦物語まで」『中央公論』41巻11号，1926（『定本柳田国男集』7巻，358～379頁，筑摩書房，1968）。
- 『山の人生』郷土研究社，1926（『定本柳田国男集』4巻，55～170頁，筑摩書房，1968）。
- 「山島民譚集（二）」『定本柳田国男集』27巻，181～243頁，筑摩書房，1970。

新刊紹介

吉岡郁夫・長谷部学著

『ミルンの日本人種論－アイヌとコロボクグルー』

人魚の進化を今号で書かれている吉岡先生は『体表解剖学』『性の人類学』『人体の不思議』『日本人種論争の幕あけ』『身体の文化人類学』と立て続けに形質人類学方面の著作を出されている解剖学が専門の医学博士である。又，名古屋民俗研究会を足場にして尾張地方の民俗研究に取り組み『自然科学と民俗学』を著し，民俗学・考古学にも造詣の深い二足の草鞋を履く人である。ワギナ・デンタータ（有菌腔）などの説話を人類学的に扱うところなど，金関丈夫博士ばりの学風を彷彿させる人でもある。

今年は国際先住民年でもあり，アイヌ民族の文化に対するの関心も高まり大阪の民族学博物館を始め，各地で特別展が開催されている。また，北海道立北方民族博物館の活動や蝦夷学会の結成など，北方文化に対する関心も高まっている。その中で，大森貝塚の紹介者，E. S. モースと同じ時代に活躍しながらも，日本人にあま

り馴染みのないJ. ミルンの業績を知らしめるために書かれたのが本書である。

第一部はミルンのコロボクグル説をミルンの来日，日本人類学の夜あけ，シーボルトの活躍ミルンの北海道・千島調査，堅穴を遺した人々日本人類学・考古学への貢献の節で述べ，オホーツク式土器を縄文式土器と区別したことなど卓見であったとしている。第二部はこの本を書く動機ともなっている旧友の故長谷部学氏との共訳でミルンの“コロボクグルすなわち蝦夷および千島列島の堅穴住民に関する考察”（1882）始め五編の歴史的論文が収録されている。細分化され全体像が見えなくなってきた今日の学問状況を考えると人間臭い初期の人類学や土俗学が懐かしく思われるのである。

（佐野 賢治）

B 6 判 256頁 雄山閣出版
1993. 8 月 刊 2800円